山形大学歴史・地理・人類学論集，第18号，７－12，2017年

「日輪兵舎」がみた戦中と戦後 ― 山形県の現存建物の事例から ―
“Nichirin Heisha（Sun barrack)” in the period before and after the war：case study of existing building in Yamagata Prefecture

松　山　　薫
MATSUYAMA, Kaoru

キーワード：日輪兵舎，満洲開拓，歴史的建造物，山形県，金山町
key words：Nichirin Heisha（Sun barrack), Agricultural emigration to Manchuria, historical building, Yamagata Prefecture, Kaneyama Town,

Ⅰ．「日輪兵舎」研究の出発点

「日輪兵舎」とは，茨城県の東茨城郡下中妻村内原（現・水戸市内原町）にあった「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所」（以下，内原訓練所）にかつて存在した，円形平面で円錐型の屋根をもつ，訓練生のための共同宿舎兼教室として用いられた建物の名称である。古賀弘人という建築家により考案されたこの特異な形の建物は，訓練生自らにより建てられる簡便さと，円形平面であること，すなわち日輪と相似形であることが皇国思想につながるというメタファーの巧みさもあって，内原訓練所長の加藤完治により訓練所施設として採用され，所内に多数建築された。さらには，制度の浸透とともに訓練所の象徴的存在となり，それを模した建物が全国各地で建てられるようになった。

しかしながら，戦時思想の体現とみなしうる日輪兵舎は，戦後は顧みられることも少なくなり，一部では考案者の名前が誤って伝えられたりもした（松山，2016）。内原訓練所以外の日輪兵舎に至っては，地方史の中に断片的・個別的記述がわずかにあるにとどまり，それらがどこに何棟くらい存在したか，という俯瞰的な観点への着目は皆無であった。

筆者は，山形県金山町に日輪兵舎にルーツを持つ建物が現存することを知ったのを機に，各地の日輪兵舎の調査を開始した。戦前の満州開拓関係の雑誌・書籍・新聞記事，戦後の各地で編纂された満州開拓史，各都道府県の自治体史，農業史，教育史，郷土写真集等を対象にした文献収集や，インターネットを介した情報収集，および現地での聞き取り調査を2002年から継続的に行った（松山，2004, 2007, 2015）。それらの結果，1938年から1945年までの間に，全国で少なくとも89か所にこの種の建物が存在したことを示唆する資料を収集した（2016年12月現在，筆者が把握している数）。

しかしながら，その中で現存しているのは，全国でわずか４か所にすぎない。石川県中能登町，山形県金山町，同遊佐町，長野県安曇野市の４例がそれである（中能登町，金山町，安曇野市のものは現在「日輪舎」とよばれ，

遊佐町のものは「日輪講堂」とよばれている)。唯一２棟が現存している山形県は，満州開拓移民送出数が長野県に次いで多く（満洲開拓史刊行会，1966)，加藤完治，石原莞爾といった満州開拓の進展にかかわった人物とゆかりが深い県でもある。

本稿では，この山形県の日輪兵舎を事例として，その建築と利用に関する事実を発掘し，こうした建物の存在が示唆するものについて考察する。

Ⅱ．山形県と日輪兵舎

１．内原訓練所の日輪兵舎建築と山形県出身者

内原訓練所長の加藤完治は，1915(大正４)年～1925年にかけて，山形県立自治講習所の初代所長を務めており，大高根道場や昭和開拓の開墾を指導したほか，山形県の農民を朝鮮半島への実験的移民として送り出していた。そうした経緯に加え，その後の成人移民の送出数も多かったことから，山形県は「満州移民発祥の地」[1)]といわれ，満蒙開拓の先進県とみなされていた。

このような背景があってか，内原訓練所の日輪兵舎建設にも山形県出身者が大きくかかわっている。1938（昭和13）年の内原訓練所建設時には，要請に応じて山形県から百数十名の青少年が全国にさきがけて先遣隊として内原入りし，日輪兵舎群の建築に携わった(松山，2004)。また，その時に内原訓練所で建築主任を務めていた渡辺亀一郎は山形県出身者であった。渡辺はかつて山形県立自治講習所の第４期生として，加藤の教えを受けていた（内原訓練所史跡保存会事務局，1998)。

２．山形県内の日輪兵舎

山形県内には竣工年が古い順に，南村山郡柏倉門伝村（現・山形市）の白鷹道場，飽海郡蕨岡村（現・遊佐町）の鳥海農民道場，最上郡金山町の神室修練農場，飽海郡高瀬村(現・遊佐町）の西山農場に日輪兵舎が存在した。このうち，神室修練農場と西山農場の日輪兵舎は現存している。解体されたものも含めて１県内に４ヶ所というのは全国的にみても多い方である。

設置・運営者はそれぞれ異なる。県内で最も早く1938年に開設された白鷹道場は，南村山郡教育会の経営によるもので，山形県立自治講習所の教育理念を継承した山形県立国民高等学校が運営にあたった。ここには日輪兵舎が２棟あり，郡内各地の学校から連日のように訓練生を受け入れていた。鳥海農民道場(1941年開設）は山居倉庫を運営し庄内米流通を管理する財団法人北斗会，神室修練農場(1943年開設）は大規模山林地主が設立した財団法人岸農山育成会によって開設された。鳥海農民道場の設立には加藤の直弟子をはじめ内原訓練所関係者がかかわっていた。神室修練農場は白鷹道場において指導にあたっていた山形県立上山国民高等学校教官を農場主任として招聘した。さらに，西山農場（1944年開設）は石原莞爾（鶴岡市出身）の教えを受けた個人が土地を提供し，戦後は石原もそこに移り住んでいた。このように，山形県の日輪兵舎の建設はいずれも加藤完治や石原莞爾といった日本人の満州観に大きな影響を与えた人物とのつながりが背後に濃厚にみられ，これは他県の多くの事例とは異なる点と考えられる。

Ⅲ．金山の「日輪舎」の事例

本章では，山形県の現存日輪兵舎のうちの１つである，最上郡金山町有屋の「日輪舎」（第１図）をとりあげる。

金山町の「日輪舎」は，1943年に満州や南洋に向かう青年に農業訓練を施すために，東北有数の大規模山林地主の岸家が運営する財団法人岸農山育成会が開設した神室修練農場の教室兼寄宿舎として建てられた。中央の土間の周りを板敷きのスペース２層が取り囲む構造は，内原のものと共通する。しかし，内原の平均的な日輪兵舎より軒高が高くて径も大きい。開設時に農場主任として勤務した笹原善松氏（故人）によると，当時「日本一の日輪兵舎を造ろう」との意気込みで，金山杉を使い，地域住民総出で建設されたという（2007年筆者聞き取り）。

笹原氏は，実は山形県で最初に建てられた前述の白鷹道場にも，山形県立上山国民高等学校の教員として勤務し，南村山郡等の多くの学校から実習に来る児童・生徒を指導していた実績があった。そのため，岸農山育英会から招かれ，出身地の金山にUターンすることになったのであった。２ヶ所の日輪兵舎にかかわった人物というのは珍しい。

岸農山育英会が神室修練農場の開設に至った理由として，笹原氏の自伝（笹原，1997）によると，最上地方で満州開拓送出熱が高まっていたことに加え，当時の岸家当主の岸三郎兵衛らが加藤完治に会って話を聞き，その考えに賛同したことが，背景にあるという。上山国民高等学校も山形県立自治講習所の後継施設で加藤完治の直系組織であるが，神室修練農場にもやはり加藤の影響や関連性が看取される。

第１図　「日輪舎」
金山町有屋，カムロファーム倶楽部内。
2004年筆者撮影。

戦後の神室農場では，葉たばこの栽培などが行われ，戦地から復員して農場に復職した笹原善松氏も，それに長年携わった。頑丈に造られた「日輪舎」はそのまま作業小屋として用いられ，吹き抜けの空間に渡した材木に葉たばこをつるして乾燥させたりしていた。

第２図は，笹原善松氏の長男の忠昭氏（故人）から提供された写真で，氏は2015年にこの写真を知人から入手した。撮影年代は戦後という他は不詳だが，仮装姿が多いことから，地元青年組織の祭における記念写真ではないかという。２階の窓から飾りの笹のようなものがのぞいていることからも，「日輪舎」を使って催しが行われていた可能性が高い。地域行事に「日輪舎」が利用されていたことを示し，なおかつ屋根がトタン葺きになる前の，杉皮葺きの時代を写しているこの写真は，非常に貴重な資料といえる。

1998年に，神室農場はカムロファーム倶楽部として生まれ変わり，自然と触れ合う体験や文化イベントが楽しめるレクリエーション施設となった。「日輪舎」は現在，イベント会場や体験農業の場として活用されている。

さらに，2016年２月には，「日輪舎」は金山町の有形文化財に指定された（第３図）。町

第２図　戦後に撮影された「日輪舎」
笹原忠昭氏提供。

第３図　「日輪舎」の近影
2016年筆者撮影。
改修工事が施され，町有形文化財の解説板が立った。

の文化財調書は,「この日輪舎は建築史に残る建造物」であり,「満蒙開拓青少年義勇軍という制度があった歴史を物語る貴重な建物」で「町の文化財として永く保存し,活用をはかることが望ましい」と述べている（金山町教育委員会，2016)。

Ⅲ．おわりに

建築から70余年を経た金山町の「日輪舎」が健在な理由として，まず元の造りが良かったこと，所有者の当該建物の維持・活用への意志が強かったことに加え，時代の変化に応じて多様な機能を求められるなか，それに柔軟に適応できる空間であったという特徴があげられる。さらに，この種の現代とは価値観の異なる時代の産物が，歴史の語り部としての役割を担うとき，特異なフォルムゆえの雄弁さが価値を発揮している。

金山町の「日輪舎」が町の有形文化財に指定されたことにより，現存日輪兵舎４件のうち３件が，文化財となった[2)]。遊佐町の「日輪講堂」のみが，町の総務課財政係の管理下にあり，現時点では文化財としては認識されていない。国策の満州開拓にルーツを持つ,

日輪兵舎様式の数少ない現存物件として恒久的に保全されるのが望ましいと思われる。満州開拓は，農村地域を大きく揺るがす地域変容を伴った。その背景を示唆する，こうした象徴性の高い施設の，地方への伝播とその影響については，今後もなお明らかにされるべき課題が多く残されているからである。

本稿は，2016年６月18日(土)に開催された山形大学歴史・地理・人類学研究会第18回大会における公開講演の内容の一部を骨子としたものである。金山町の「日輪舎」に関する調査に多大なご協力を賜りました故・笹原善松様と故・笹原忠昭様，発表の機会を与えていただきました山形大学人文学部教授の山田浩久先生，貴重な情報をいただきました金山町産業課・山形大学大学院社会文化システム研究科社会システム専攻の西田　徹様，当日有益なコメントを賜りました研究会の諸先生方に御礼申し上げます。

註

１）たとえば，当時の満州移住協会（拓務省の外郭団体）の機関紙『拓け満蒙』，２（２），1938. では，「拓け満蒙地方めぐり３　山形県の巻」という記事に，「満洲移民発祥の地　割当の外に庄内郷を建設　流石に燃ゆる山形県」という見出しがある。

２）安曇野市の「日輪舎」は登録有形文化財（2009年），中能登町の「日輪舎」は町の有形文化財（2013年）。

文　献

内原訓練所史跡保存会事務局（1998）：満州開拓と青少年義勇軍―創設と訓練―．内原訓練所史跡保存会，内原町.

金山町教育委員会（2016）：文化財調書．（金山町資料）.

笹原善松（1997）：笹原善松体験自叙伝（前編）―時代は流れる　こんな人生―．（私家版）

松山　薫（2004）：満蒙開拓の痕跡をたずねて―山形県にあった「日輪兵舎」〔序章〕―．東北公益文科大学総合研究論集，８，75-90.

松山　薫(2007)：日輪舎(金山町). Future SIGHT, 36，８-９.

松山　薫（2015）：日本各地の「日輪兵舎」―忘れられた満蒙開拓青少年義勇軍の象徴―．季刊地理学，67，191-195.

松山　薫（2016）：日輪兵舎の創案者に関する考察(一)．東北公益文科大学総合研究論集，31，63-69.

満洲開拓史刊行会編（1966）：満洲開拓史.

(1938)：拓け満蒙地方めぐり３　山形県の巻：満洲移民発祥の地　割当の外に庄内郷を建設　流石に燃ゆる山形県．拓け満蒙，２（２），44-46.